

西前 明 (函館大学) saizen@x.email.ne.jp

1. はじめに

本発表では、(1)のような不定詞関係節、および、それと表面上同じに見える不定詞節が be 動詞に後続する(2)のような例について考察する。

- (1) a. the fork [to eat the dessert with ___] b. the fork [with which to eat the dessert ___]
 (2) a. The fork is [to eat the dessert with ___]. b. *The fork is [with which to eat the dessert ___].

主に(3)-(8)の現象を説明する。(3)と(4)の対立は、Ross (1986: 231)で報告されたもので、不定詞関係節において空所が埋め込み文の中にあると容認度が下がるというものである。(5a)と(5b)、(6)と(7)、(7)と(8)の対立は、be 動詞に不定詞節が後続する構造に関するものである。

- (3) a. the cot [on which to sleep ___] b. the cot [to sleep on ___]
 (4) a. *the cot [on which to arrange [that Mary should sleep ___]] b. *the cot [to arrange [that Mary should sleep on ___]]
 (5) a. The fork is [to eat the dessert with ___]. b. *The fork is [with which to eat the dessert ___].
 (6) a. the fork [to eat the dessert with ___] b. the fork [to sterilize ___] c. the fork [to be sterilized ___]
 (7) a. The fork is [to eat the dessert with ___]. b. *The fork is [to sterilize ___]. c. The fork is [to be sterilized ___].
 (8) a. The fork must be [to eat the dessert with ___]. b. *The fork must be [to sterilize ___].
 c. *The fork must be [to be sterilized ___]

2. 不定詞関係節の構造

2.1 不定詞の主語

Berman (1974: 39)は、不定詞関係節に顕在的主語が現れない証拠として、(9)を挙げている。不定詞関係節とともに現れる for DPが不定詞節とは独立した前置詞句であるとすれば、そのような前置詞句の中に虚辞の thereと慣用句要素の advantageが生じているために不適格であると説明できる。

- (9) a. *He has some books for there to be in the library. (Berman 1974: 39)
 b. He has some books that there are in the library. (*ibid.*)
 c. *Here is an opportunity for advantage to be taken of. (*ibid.*)
 d. Here is an opportunity that advantage can be taken of. (*ibid.*)

Baltin (1995)は、PRO が TP の指定部に移動せず動詞句内に留まる証拠として、(10)-(12)の遊離数量詞の現象と(16)の wanna 縮約の現象を挙げている。遊離数量詞と被修飾語の義務的隣接、および、PRO の動詞句内残留を仮定すると、(14b)・(15b)で示す通り、(11b)・(12b)では、all と PRO の隣接が満たされていない。一方、(10)では、(13)で示す通り、these people と all の隣接が満たされる((10a)では基底位置において満たされる(Baltin (1995: 228)を参照))。wanna 縮約については、(17a)で示す通り、PRO の動詞句内残留を仮定すると、want と to の間に縮約を阻害する要素がなくなり、阻害する要素がはさまっている(17b)との対立を説明できる。

- (10) a. For these people to all leave would be inconvenient. (Baltin 1995: 227)
 b. For these people all to leave would be inconvenient. (*ibid.*: 211)
 (11) a. To all have been doing that would have been inconvenient. (*ibid.*)
 b. *All to do that would be inconvenient. (*ibid.*)
 (12) a. The men promised me to all resign. (*ibid.*: 222)
 b. *The men promised me all to resign. (*ibid.*)
 (13) a. For these people to all ~~these people~~ leave would be inconvenient.
 b. For these people all to ~~all these people~~ leave would be inconvenient.
 (14) a. To all PRO have been doing that would have been inconvenient.
 b. *All to PRO do that would be inconvenient.
 (15) a. The men promised me to all PRO resign.
 b. *The men promised me all to PRO resign.
 (16) a. I wanna visit Sally. (Baltin 1995: 244) b. *Who do you wanna visit Sally?
 (17) a. I wanna ~~to~~ [PRO visit Sally]. b. *Who do you wanna [~~who to~~ visit Sally]?

Berman (1974)と Baltin (1995)の帰結として、(18)を主張することができる。

- (18) 不定詞関係節の TP 指定部に主語は生起しない。

2.2 関係詞の着地点

不定詞関係節における関係詞の着地点は、TP の指定部と CP の指定部であると仮定する。メカニズムとしては、Rizzi (1996)の Wh 基準、並びに、(20)を仮定する。

(19) The *Wh*-Criterion:

A. A *wh*-operator must be in a Spec-head configuration with X^0 [+wh].

B. An X^0 [+wh] must be in a Spec-head configuration with a *wh*-operator. (Rizzi 1996: 64)

(20) 不定詞関係節を構成する補文標識と TP の主要部 *to* は素性[+wh]を持つ。

(20)を仮定すると、不定詞関係節で補文標識の *for* を用いることはできなくなる。なぜなら、(20)に従うと、CP の指定部にある関係詞は TP の指定部から移動してくることになるが、*for* の補部である TP の指定部からの移動は一般に禁止されている。不定詞関係節に *for* が現れないということは、顕在的主語が現れないということである。PRO については、(空格のような)格の照合はないか、あるいは、PRO の格照合は EPP 効果を生まないとすれば、(18)を導くことができる。

2.3 関係詞の省略

関係詞の省略は音韻部門における音韻素性の削除の結果であると仮定し、(21)を規定する。不定詞関係節において、CPの指定部で顕在化するものはPPのみであり、TPの指定部で顕在化するものは一切ない。

(21) a. 不定詞関係節のTPの指定部を占める要素は音韻素性の削除を受ける。

b. 不定詞関係節のCPの指定部を占める要素は、PPを除いて、音韻素性の削除を受ける。

2.4 文法範疇

不定詞関係節の *to* 不定詞に関して、(22)を仮定する。[+p]を持つ *to* が主要部である TP を prepositional TP(=pTP)と呼ぶことにする。pTP は文中で TP だけでなく PP と同じ位置も占めることができると仮定する。

(22) 不定詞関係節を構成する TP の主要部 *to* は、前置詞の範疇素性[+p]を持つことができる。

(注 1) Hasegawa (1998)は、不定詞関係節の TP の主要部 *to* が選択的に[+P]の素性を持つと仮定している。

(注 2) 不定詞関係節を構成する TP は常に pTP なのか、pTP でない TP であることもあるのかについては論じない。

(注 3) 不定詞関係節以外の *to* が[+p]を持つ可能性については議論しない。例えば、Abe (1986)は、*try* などの動詞の補文の *to* は[+INFL](=[+tense])を持った前置詞であると仮定している。

(注 4) 前置詞の *to* が不定詞節 TP の T に変化した歴史的過程については Tanaka (1997)を参照。

(20)・(21)・(22)から、不定詞関係節の構造は(24)・(25)のようになる。(24)は、関係詞が顕在化しない(23a)の構造であり、(25)は顕在化する(23b)の構造である。(C は空補文標識)

(23) a. the fork [to eat the dessert with ____]

b. the fork [with which to eat the dessert ____]

(24) a. the fork [_{pTP} ~~which~~ to(+wh)] PRO eat the dessert with ~~which~~]

b. the fork [_{CP} ~~which~~ C(+wh)] [_{pTP} ~~which~~ to(+wh)] PRO eat the dessert with ~~which~~]

(25) a. *the fork [_{pTP} with which to(+wh)] PRO eat the dessert ~~with which~~]

b. the fork [_{CP} with which C(+wh)] [_{pTP} ~~with which~~ to(+wh)] PRO eat the dessert ~~with which~~]

(24)・(25)の帰結として、(26)を主張したい。

(26) 関係詞が顕在化する不定詞関係節の文法範疇は常に CP であるが、関係詞が顕在化しない不定詞関係節の範疇は、CP だけでなく pTP も可能である。

2.5 CP と pTP

(27)の構造は(28)のようになる。(26)に従うと、(27)の対立について、関係詞が顕在化しない不定詞関係節と顕在化する不定詞関係節の文法範疇の違いに原因を求めることができる。(28a)の関係節はpTPである。(28a)は文法的であるが、(28a)のpTPをPPに取り替えた(29a)も文法的である。(28b)の関係節はCPである。(28b)は非文法的であるが、(28b)の不定詞関係節のCPを定形関係節のCPに取り替えた(29b, c)も非文法的である。すなわち、(26)を仮定すると、(28b)が悪いのは(29b, c)が悪いのと同じ理由からだと考えることができる。

(27) = (5) a. The fork is [to eat the dessert with ____].

b. *The fork is [with which to eat the dessert ____].

(28) a. The fork is [_{pTP} ~~which~~ to PRO eat the dessert with ~~which~~].

b. *The fork is [_{CP} with which C [_{pTP} ~~with which~~ to PRO eat the dessert ~~with which~~]].

(29) a. The fork is [_{PP} for eating the dessert].

b. *The fork is [_{CP} with which I eat the dessert ____].

c. *The fork is [_{CP} (that) I eat the dessert with ____].

2. 不定詞関係節の locality

Ross (1986: 231)の文法判断によると、不定詞関係節において、空所が埋め込み文の中にあると容認度が下がる。本発表のインフォーマント調査でもそれは確認できた。ただし Ross はその判断を?で示したが、本発表の調査結果としては*を与えたい。

(30) a. Here's a knife for you to cut up the onions with. (Ross (1986: 230))

b. ?Here's a knife for you to say that you cut up the onions with. (*ibid.*: 231)

(31) a. the cot [to sleep on ___]

b. the cot [on which to sleep ___]

c. *the cot [to arrange [that Mary should sleep on ___]]

d. *the cot [on which to arrange [that Mary should sleep ___]]

e. the cot [on which I could arrange [that Mary should sleep ___]]

本発表では、不定詞関係節に見られるこの局所性を、(32)のようないわゆる improper movement の現象としてとらえたい。improper movement は(33)のように、A/A'位置は(34)のようにそれぞれ定義する。

(32) a. *John(A) is believed [_{CP} ~~John~~(A') [_{TP} it is likely [_{TP} ~~John~~ to ~~John~~ win]]].

(adapted from Lasnik and Saito 1992: 94)

b. *It is natural for John(A) to be believed [_{CP} ~~John~~(A') [_{TP} it is likely [_{TP} ~~John~~ to ~~John~~ win]]].

(33) Improper Movement : A'位置から A 位置への移動はできない。

(34) A 位置は語彙範疇 LP と TP の指定部と補部である。それ以外の位置は A'位置である。

(34)に従うと、TP の指定部も PP の指定部もどちらも A 位置なので、pTP の指定部は、TP の指定部としても PP の指定部としても A 位置となる。(31)の構造は(35)のようになる。(35c)と(35d)に improper movement が含まれている。that 節の指定部(=A'位置)から pTP の指定部(=A 位置)への関係詞の移動が improper movement である。

(35) a. the cot [_{pTP} ~~which~~(A) to PRO sleep on ~~which~~(A)]

b. the cot [_{CP} on which(A') [_{pTP} ~~on which~~(A) to PRO sleep ~~on which~~(A)]]

c. *the cot [_{pTP} ~~which~~(A) to PRO arrange [_{CP} ~~which~~(A') that Mary should sleep on ~~which~~(A)]]

d. *the cot [_{CP} on which(A') [_{pTP} ~~on which~~(A) to PRO arrange [_{CP} ~~on which~~(A') that Mary should sleep ~~on which~~(A)]]]

e. the cot [_{CP} on which(A') I could arrange [_{CP} ~~on which~~(A') that Mary should sleep ~~on which~~(A)]]]

(36)で示す通り、不定詞間接疑問文では、疑問詞を埋め込み文から抜き出しても非文にはならない。不定詞関係節のtoと異なり、不定詞間接疑問文のtoは[+wh]を持たないとすれば、疑問詞がTPの指定部を経由することはなく、improper movementにはならない。(36)の構造は(37)のようになる。

(36) I don't know [what to tell you [that he thought ___]].

(37) I don't know [_{CP} what(A') [_{TP} to PRO tell you [_{CP} ~~what~~(A') that he thought ___]]].

(注5) Chomsky (1995: 63-64, 196)は A/A'位置を L 関連性(L-relatedness)という概念で再定義した。語彙範疇 L と機能範疇 T (および Agr)の指定部と補部が L 関連的位置とされる。L 関連的位置が従来の A 位置に、非 L 関連的位置が従来の A'位置にそれぞれ対応する。なお、動詞句の指定部あるいは補部に位置する副詞句も L 関連的位置にあるとされる。本発表では、L 関連ではなく従来の A/A'という用語を用いるが、理論的にはこの L 関連性による A/A'位置の定義に従う。

(注6) Chomsky (1995: 63, 329-334)に従い、副詞句も動詞句の指定部あるいは補部に位置する、ゆえに、A 位置(=L 関連的位置)にあると仮定する。

(注7) improper movementの理論的位置付けと定式化の仕方については議論しない。Lasnik and Saito (1992: 93-94) ; Chomsky (1995: 326-327)などを参照。

本発表の調査によると、(38a)は容認する話者と容認しない話者がいる。しかし容認する話者も(38b)は容認しない。(38b)の構造は、likeをPと考えれば(40a)のようになり、[+p]を持つC(=prepositional C)と考えれば(40b)のようになる。不定詞関係節のtoと同じく、likeは[+wh]をとり、指定部の関係詞の音韻素性は削除されると仮定する。

(38) a. %He might make an error [like the world has never seen ___].

b. *He might make an error [like anyone would say [that the world has never seen ___]].

(39) a. He might make an error [that the world has never seen ___].

b. He might make an error [that anyone would say [that the world has never seen ___]].

(40) a. *He might make an error [_{PP} ~~which~~(A) like([+wh]) anyone would say [_{CP} ~~which~~(A') that the world has never seen

which(A)]].

- b. *He might make an error [_{PCP} **which(A/A')** like([+wh]) anyone would say [_{CP} **which(A')** that the world has never seen **which(A)]].**

(40a)の関係詞の移動は明らかにimproper movementである。関係詞はCPの指定部(=A'位置)からPPの指定部(=A位置)に移動している。一方、likeがpCであるとすれば、(40b)で示す通り、その指定部はA位置であると同時にA'位置でもあるということになるだろう。しかしこの場合もA位置であることに違いは無いので、(33)の定義を用いれば、(40b)の関係詞の移動もimproper movementになる。

3. be+to 不定詞

3.1 問題

2.5節で、(41b)=(42b)が悪いのは(43b, c)が悪いのと同じであると述べた。

- (41) = (27) a. The fork is [to eat the dessert with ____].
b. *The fork is [with which to eat the dessert ____].
(42) = (28) a. The fork is [_{PTP} **which** to PRO eat the dessert with **which**].
b. *The fork is [_{CP} with which C [_{PTP} **with which** to PRO eat the dessert **with which**]].
(43) = (29) a. The fork is [_{PP} for eating the dessert].
b. *The fork is [_{CP} with which I eat the dessert ____].
c. *The fork is [_{CP} (that) I eat the dessert with ____].

しかし、空所を持った不定詞節の中には、顕在的關係詞を伴わなくても be 動詞に後続できない(44b)のような例がある。(45)で示す通り、(44)の不定詞節と表面上同じに見える不定詞節を関係節として用いると、全て文法的となる。

- (44) a. The fork is [to eat the dessert with ____].
b. *The fork is [to sterilize ____].
c. The fork is [to be sterilized ____].
(45) a. the fork [to eat the dessert with ____]
b. the fork [to sterilize ____]
c. the fork [to be sterilized ____]

(注8) Huddleston and Pullum (2002: 1250)は、(ic, d)は例外的な存在であると述べている。また(ie)は for you を欠くことはできないと述べている。本発表ではこれらの例については考察しない。(ie)の構文については、Aki (1987)を参照。

- (i) a. *The house is to sell ____.
b. *You are to criticize ____.
c. The house is to let ____.
d. You are to blame ____.
e. The decision is for you to make ____.

3.2 不定詞関係節の解釈

(44)と(45)の問題を解くカギは不定詞節が表す意味にある。Quirk et al. (1985: 1269)は、先行詞を意味上の目的語とする不定詞関係節は常にmodalの解釈(例えばshould)になると述べているが、これは正しくない。本発表の調査によると、(46a)は(46c)のnonmodalの解釈を許さないが、(47a)は、(47b)のmodalの解釈と共に(47c)のnonmodalの解釈を許す。(47c)の解釈は「(道具として)物を使う目的」を表していると思われる。この意味を表す(48)のような不定詞節は、forを用いて(49)のように言い換えることができるが、(50)のようなmodalを表す不定詞節は、(51)のように言い換えることができない。

- (46) a. the fork for you to sterilize (= (b); ≠ (c))
b. the fork that you should sterilize
c. the fork that you sterilize
(47) a. the fork for you to eat the dessert with ((= (b) or (c))
b. the fork that you should eat the dessert with
c. the fork that you eat the dessert with
(48) a. the fork to eat the dessert with
b. the curtain to block sunlight with
(49) a. the fork for eating the dessert
c. the curtain for blocking sunlight
(50) a. the fork to sterilize
b. the curtain to wash
(51) a. *the fork for sterilizing
b. *the curtain for washing
(45c)のような例については、(52)のようになる。(52a)は、(46a)と同様に(52c)の nonmodal の解釈を持たず、forを用いて(52d)のように言い換えることができない。
(52) a. the fork to be sterilized (= (b); ≠ (c))
b. the fork that should be sterilized
c. the fork that is sterilized

d. *the fork for being sterilized

(46)-(52)から、(45)の不定詞関係節が表す意味を(53)でまとめる。

- (53) a. the fork [to eat the dessert with ___] (modal or nonmodal)
b. the fork [to sterilize ___] (modal)
c. the fork [to be sterilized ___] (modal)

3.3 be to 不定詞構文

(54)について考える。(54)は法助動詞を用いて(55)のように言い換えることができる。(54)は「予定・義務など」の modal の意味を表すいわゆる be to 不定詞構文であると考えたい。この構文は(56)のような there 構文を許すので、(57)のような繰り上げ構文と同じ構造を持つと仮定する。(54)の構造は(58)のようになる。(58)において、主節動詞の is は、(57)の seems と同じように、不定詞節を補部とする繰り上げ動詞であり、the fork は不定詞節の中から主節の主語の位置に移動している。

(54) = (44c) The fork is [to be sterilized ___].

(55) The fork should be sterilized.

(56) a. There is [to be an important meeting tomorrow].

b. President Bush has announced there is to be a peace conference to try to resolve the long-standing dispute between Greece and Turkey over Cyprus. (WordbanksOnline (BBC0023))

(57) There seems [to be a unicorn in the garden].

(58) The fork is [to be sterilized ~~the fork~~].

McCawley (1988: 250)は、be to 不定詞の be が modal の意味を担うと述べている。be to 不定詞の be が法助動詞である証拠として(59)をあげることができる。(60)で示す通り、法助動詞が他の(法)助動詞に後続しないことはよく知られた事実である((60)では法助動詞の can が他の(法)助動詞に後続している)。be to 不定詞の be が法助動詞であるとすれば、(59)が悪いのはこの事実によると言える。

(59) *The fork *must/should/can* be to be sterilized.

(60) a. *They should can sterilize the fork. b. *I want to can sterilize the fork. c. *I am can sterilize the fork.

助動詞の連鎖については、Akmajian, Steele and Wasow (1979)の線に沿って、それらは階層を成すと仮定する。例えば[can be]の構造は、can の補部を be が作る句が占める。すなわち can は be の句を選択する。この線に沿って、(60)の現象を(61)のように記述する。(61)に従うと、be to 不定詞の to は法助動詞ではないことになる。(54)の構造を改めて(62)で示す(is の構造的な位置および the fork の中間着地点(があるかどうか)については表示しない)。

(61) 法助動詞は他の(法)助動詞に補部として選択されることはない。

(62) The fork is(=modal) [_{TP} to(=nonmodal) be sterilized ~~the fork~~].

3.4 be + 不定詞関係節

(63)について考える。(63)は(54)と異なり modal の解釈を持たず、(64)のように言い換えることはできない。さらに(65)で示す通り、(59)と異なり、be の前に法助動詞を置くことができる。(法)助動詞に後続できる(=選択される)ということは、(61)により、この be は法助動詞ではないということである(is に後続する to も法助動詞ではない)。ゆえに、(63)は(54)の be to 不定詞構文ではない。(63)は、(66)で示す通り、((48)と同じく)for を用いて言い換えることができる。すなわち「物を使う目的」を表している。

(63) = (44a) The fork is [to eat the dessert with ___].

(64) Someone should eat the dessert with the fork.

(65) The fork *must/should/can* be [to eat the dessert with].

(66) The fork is for eating the dessert.

(63)の構造は(67)のようになると仮定する。(67)において、is は外項として the fork を、内項として不定詞関係節 pTP をそれぞれ選択している(is と the fork は T と TP 指定部にそれぞれ移動する)。

(67) The fork [_T is] [_{VP} ~~the fork~~ is(=nonmodal)] [_{pTP} ~~which~~ to(=nonmodal) PRO eat the dessert with ~~which~~].

(注9) (67)のように、be が外項と内項を選択する構造については Safir (1985:121)を参照。

(63)には(64)のような modal の解釈はないと述べた。すなわち、(63)に(68a)の解釈はない。(67)において is が外項と内項を選択すると仮定すると、(68a)の構造は(68b)のようになる。(68b)では、pTP の法助動詞 to が助動詞の is に選択されているので、(61)の違反として排除できる。

(68) a. *The fork is [_{pTP} to(=modal) eat the dessert with ___].

b. *The fork [_T is] [_{VP} ~~the fork~~ is(=nonmodal)] [_{pTP} ~~which~~ to(=modal) PRO eat the dessert with ~~which~~].

(67)・(68)で示したように((69a)・(69b)でそれぞれ簡略表記する)、[be+不定詞関係節]の構造において、不定詞関係節には(69a)の nonmodal の解釈しかないことを見た。

(69) a. The fork is [_{pTP} to(=nonmodal) eat the dessert with ____].

b. *The fork is [_{pTP} to(=modal) eat the dessert with ____].

一方、不定詞関係節が先行詞を直接後置修飾するときは、(53a)ですでに述べたように、(70a)の nonmodal の解釈を持つ場合と(70b)の modal の解釈を持つ場合がある。(70a, b)の法助動詞 to は、他の助動詞に選択されていないので、(69b)と異なり、(61)の違反にはならない。(71)は(70)の構造である。

(70) a. the fork [_{pTP} to(=nonmodal) eat the dessert with ____]

b. the fork [_{pTP} to(=modal) eat the dessert with ____]

(71) a. the fork [_{pTP} ~~which~~ to(=nonmodal) PRO eat the dessert with ~~which~~]

b. the fork [_{pTP} ~~which~~ to(=modal) PRO eat the dessert with ~~which~~]

3.5 *The fork is to sterilize vs. the fork to sterilize

(72)の対立について考える。非文法的な(72a)の構造として、(73a)の be to 不定詞構文((62)を参照)と(73b)の [be+不定詞関係節]((68b)を参照)を考えてみる。どちらも modal の意味を表す。(73a)では、the fork が格位置から格位置に移動しているが、これは一般に禁止された移動である((62)はそのような移動を含まない)。(73b)では、(68b)と同じく、pTP の法助動詞 to が助動詞の is に選択されているので、(61)の違反となる。

(72) a. = (44b) *The fork is [to sterilize ____].

b. = (45b) the fork [to sterilize ____].

(73) a. *The fork is(=modal) [_{TP}to(=nonmodal) sterilize ~~the fork~~].

b. *The fork [_T is] [_{VP} ~~the fork~~ is(=nonmodal) [_{pTP} ~~which~~ to(=modal) PRO sterilize ~~which~~]].

一方、文法的な(72b)の構造は、(74)のようになる((71b)を参照)。(74)の to は他の助動詞に選択されていないので、(73b)と異なり、(61)の違反にはならない。

(74) the fork [_{pTP} ~~which~~ to(=modal) PRO sterilize ~~which~~]

(注 10) (ii) と対照的に(i)が悪いことから、(72a, b)の不定詞節が「物を使う目的」を表す nonmodal の関係節である可能性はない。すなわち、(72a, b)の構造として、(iii a, b)は除外してよい。

(i) a. *The fork is for sterilizing.

b. = (51a) *the fork for sterilizing

(ii) a. = (66) The fork is for eating the dessert.

b. = (49a) the fork for eating the dessert

(iii) a. The fork [_T is] [_{VP} ~~the fork~~ is(=nonmodal) [_{pTP} ~~which~~ to(=nonmodal) PRO sterilize ~~which~~]].

b. the fork [_{pTP} ~~which~~ to(=nonmodal) PRO sterilize ~~which~~]

(注 11) 格位置から格位置への移動を禁止する具体的なメカニズムについては議論しない。

参考文献

Abe, J. (1986) "Prepositional To-Infinitives in English," *English Linguistics* 3, 79-97.

Aki, T. (1987) "On a Derivative Construction: *That is for you to decide*," *Studies in English Literature English Number* 1987, 79-96.

Akmajian, A., S. M. Steele and T. Wasow (1979) "The Category AUX in Universal Grammar," *Linguistic Inquiry* 10, 1-64.

Baltin, M. R. (1995) "Floating Quantifiers, PRO, and Predication," *Linguistic Inquiry* 26, 199-248.

Berman, A. (1974) "Infinitival Relative Constructions," *CLS* 10, 37-46.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, Mass.

Hasegawa, H. (1998) "English Infinitival Relatives as Prepositional Phrases," *English Linguistics* 15, 1-27.

Huddleston, R. and G. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press, Cambridge.

Jackendoff, R. (1977) *X Syntax: A Study of Phrase Structure*. MIT Press, Cambridge, Mass.

Jones, C. (1985) *Syntax and Thematics of Infinitival Adjuncts*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move α : Conditions on Its Application and Output*. MIT Press, Cambridge, Mass.

McCawley, J. (1988) *The Syntactic Phenomena of English*, Vol. 1. University of Chicago Press, Chicago.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

Rizzi, L. (1996) "Residual Verb Second and the Wh-Criterion," in A. Belletti and L. Rizzi, eds., *Parameters and Functional Heads*. Oxford University Press, Oxford.

Ross, J. R. (1986) *Infinite Syntax!* Ablex, Norwood, NJ.

Safir, K. (1985) *Syntactic Chains*. Cambridge University Press, Cambridge, London.

Tanaka, T. (1997) "Minimalism and Language Change: The Historical Development of To-Infinitives in English," *English Linguistics* 14, 320-341.